
のんびり屋

エン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
のんびり屋

【Nコード】
N6227F

【作者名】
エン

【あらすじ】
のんびり屋で神様に愛されてる(?)瀬田来来と美術部のほのぼの。連載とか言っておきながらも、時間軸も来来以外の登場人物も変わっちゃうんで短編気分です。

空を眺めて小一時間(前書き)

お題提供：ひよこ屋様 『のんびり屋』

空を眺めて小一時間

来来さん来来さん、あなたは どうして そんなに

のんびり屋なんですかあっ!!

おっと、突然叫んでごめんなさい。

今叫んでいた来来さんとは道路に座り込んで極上の微笑みでこちらに手を振っておられる瀬田来来先輩のことです。
そして来来さんの周りにはおにーさん方。アレですね。お怒りですね。

今度は何をしたんでしょうか

「あ、良平君！おはよう！」

その前に周囲（おにーさん方）をどうにかしましょうよう。

「え？この方々もどなたかと待ち合わせなんじゃないの？」

そんなわけない。

さすがにこのシツコミは心の中に留めておきました。

にしても、どうしましょう……。

「お前ら……無視してんじゃねえ!!」

あ。キレた。

「来来さん!!」

「あつ、そうだった!!」

ゴッ

「ん？」

……。

えー、説明させていただきますと、キレたおにーさん方はその原因
であろう来来さんに襲いかかったんです。まあ、

気持ちはわかる。

そしたらえー、なんといいいますか……

タイミング良くあげられた手にぶつかっちゃたんです。

来来さん、あなた本当に……

計算ではないんですよね？

「私、ケンカできないよ〜」

アハハ、と手をふる来来さん。正直、恐いですよ？

「ほら、はやくしないと遅れちゃうよ〜?」

その言葉で思い出しました。

「こんなところで何してるんですか」

とてもナチュラルに集合したから分からなかったかと思いますが本当の集合場所はここから10分くらい歩いた駅前。ついでに僕はもう既に遅刻中です。

「んー、お空がきれいだなーって」

だからって道路の真ん中で座り込みますか、普通。

そのうえ待ち合わせ時間過ぎてるのに。

「今何時だかわかってます?」

「えーと、家出たのが8時ぴったりくらいだから……20分くらい?」

現在時刻 9 時 5 分。

この方が遅刻魔の理由が分かった気がしました。

大切なのは、心のゆとり（前書き）

はじめに書いたあらすじと全く違うものになってしまいました。

むしろ良平君関係ないです。時間軸も違いますがそれでも来来は来
来でした（笑）

大切なのは、心のゆとり

来ちゃん来ちゃん、あんたはどうしてそう

のんびり屋なのよ

「だってまだまだ時間はたっぷりですよー？」

どこがつ！？

それは文化祭前日に自分と同じくらいの大きさの真っ白いキャンパスを前にしていえるセリフじゃない。んだけどそれをあっさりと言つてのけたのは数少ない後輩、瀬田^{せたらいぢ}来^き来^き。

やっぱりこの子が我が部一番の問題児ね。

「明日までよ？大丈夫なの？」

一応聞いてみると来ちゃんはうーん、と口元に手を当てた。

「なーんにも思いつかないんですよね〜」

まっ、どうにかなりますよ！と花のような笑顔を私に向けてくる。

本当に？

かなり不安なんだけど……。

すると来ちゃんが一瞬目を見開く。

そして急に手を動かし始めた。

「おおっ？」

左手に持った鉛筆がなんの迷いもなく動かされてさっきまで白かったキャンパスに数本の線が引かれる。

なんか思いついたっぽい？

さらに水彩絵の具を刷毛を使って塗っていく。

その姿はまるで踊っているみたい。穏やかで楽しそうで、私はいつの間にか彼女に見入っていた。

「ぶっっ」

来ちゃんが手を止めたのは下校時刻を少し過ぎたころ。
私も他のみんなもそして見回りにきた先生までもが帰らないで来ち
やんと来ちゃんの絵を見ていた。

「・・・・・・・・」

私にみんなの視線が集まる。

誇らしげな来ちゃんがえへへ、と私にピースサインを送ってくる。

・・・・・・・・私に、どうしろと？

「頑張っちゃいました、どうですか？」

真っ白かった来ちゃんのキャンパス。そこには今、

困り顔の私がありました。

自分だけのスローペース（前書き）

今回振り回されるのは先生です。顧問です。

自分だけのスローペース

瀬田瀬田、君はなんでそこまで

のんびり屋さんなんだろうね

この学校はとても広くて自然もたくさんあるから授業ではよくそれを利用する。

その時は終わったら美術室に帰ってきて、終わらなくても鐘が鳴ったら帰ってくる、のが基本……なんだけどねえ。

あの子はいつも帰って来てくれないなあ……。

あの子の名前は瀬田来来。我が美術部の部長で、そして今日も一人だけ帰ってこない。

しょうがない、探しに行こうか。

岩のウラ、ウサギ小屋、花壇の中……

まるで小学生のかくれんぼだけどそんな所にいちやうのが瀬田だから入念にチェックしていく。

前には鯉の池の中、なんて場所もあった。

凄いよねえ。

まあ、そのあとが大変だったからもうないとは思っただけど絶対、
って言えないところが瀬田クオリティ。

と、元の場所に戻って来てしまった。

なんだかんだいってまじめな子だから勝手に帰るはずはないんだけど。
でもそしたらいつたいたいどこに行っちゃったんだろう？

軽く首をかしげると真上から声が降ってきた。

「センサー、出来たよ」

パツと見上げても当然ながら誰もいない。空耳かな？

とりあえずもう一度瀬田を探しに行こうと思いき出そうとすると
グイッと後ろから襟を引っ張られた。

驚いてふりむこうとするとパツと手は外れて、そしてそこには先ほ
どから探していたあの子の姿が。

「せ「ハイっ！」

口を開こうとするとその前に授業用のスケッチブックを押し付けら
れる。そこには青が一面に描かれて、というか塗ってあった。

青・・・空かな。

「もう次の授業が始まっちゃてるから急がないとなんで」

その言葉に腕時計を見てみるとちょうど休憩時間は終わっているところ。

あとで瀬田の次の授業の先生に謝っておかないとなあ。

「じゃあ、またね」

手を振って踵を返す瀬田は相変わらずゆっくりと歩いている。

おいおい、もうちょい急げ

それでも彼女は相変わらずのスローペース。
しょうがないなあ。

そういえば、と思い出した。
今日はどこにいたの？

瀬田はクルッと回るように振り向いた。その顔にはちょっぴり意地の悪い笑顔が。

「上ー!」

それ以上は何も言わずに教室へ帰っていく。

上・・・？

結局どこにいたのかは永遠の謎。
ほんと、どこにいたんだろう？

もう少し、ゆっくり歩こう

来来、来来、お前は どうして そんなに

のんびり屋なんだよ……

「班長ー、またいないよー」

その言葉だけで誰のことかわかってしまう自分ってなんなんだろう。
1年生の元気な声に朝からため息をついてしまった。

いなくなったのは副班長の瀬田来来。

オレとはあいつが小学校入学前に引越して来た時からの長い付き合いで、同じ登校班で学校に通ってもう6年目。そんなオレですら
来来がまともについてきていた記憶はない。

だからあー、またか、なんて思いつつも後ろを振り向くとあきれ顔
の5年生が肩をすくめた。気が付いていたのに報告しなかったら
しい。

慣れたな。うん。

たまにいなくなるならまだしも来来は毎日のようにいなくなるから
な。

もう一度ため息をついてオレは学校へと顔を向けた。

放課後。

ちよーつと遊びすぎて先生に呼び出しを受けてしまったオレは、いつもなら家に帰りついている時間にやっと教室へランドセルを取りに行けるようになっていた。

「あれ？太一くんが珍しいね」

教室に入ると来来がゆったりとランドセルを背負っていた。時刻は午後4時。

遅くね？

「いつもこんな感じだよ」

来来はふにゃとかそんな感じの音が聞こえてきそうな笑顔でそう答えてじゃっ明日ー、とオレの横をすり抜けていった。急いで呼び止めて自分もランドセルを背負う。

「一緒に帰ろーぜ」

すると来来は少し驚いたような顔をしたけどすぐに笑顔に戻ってうなずいた。

「来来ホール？」

来来と帰り始めてしばらくしたころ、オレはポツリとつぶやいた。隣では来来が猫と小さな女の子を連れて、お爺さんと世間話をして
いる。

猫はいつの間にかついてきていた。

女の子は道の真ん中で泣いていた迷子。来来が声をかけたらすぐに泣きやんだ。本人曰く慣れているんだそう。

お爺さんも来来のお友達なんだそう。

今はもういなくなったけどさっきなんてスズメを頭に載せていた。

そう、オレたちは、というか来来はまるでブラックホールみたいいろいろな物呼び寄せながら帰っている。

おかげで普通の倍以上の時間がたってもまだ家には程遠いところ
いた。

今まで一緒に帰ったことがなかったから知らなかったけどもしかして朝もこんななのか？

「朝、んーいつも？はもつと多いかな。多分太一くんがいるから遠慮してくれてるんだよ」

.....

明日の登校班は5年生に任そう.....

急がば回れ、だよ？（前書き）

これだけは1話目の“空を眺めて小一時間”とリンク、てか続きです。良平君の苦勞は続きます

急がば回れ、だよ？

来来さん来来さん、あなたはどうしてそんなに

のんびり屋でいられるんですか？

「てか、そんな場合じゃないでしょう？」

僕は先ほどから野良犬と遊びだした来来さんこと瀬田来来先輩にあきれ声で言ってみました。

今日は部活の集まりなのですが少し寝坊してしまっただけです。それで走っていたら道路の真ん中に座り込んでいる来来さんを見かけて、それで一緒に行くことになったのですが……。

「大丈夫大丈夫」

この方遅刻してるってわかってない気がしますね。

大体、あなた部長じゃないですか。他の部員が待ってますよ？

「良平君は心配性だねー」

心配じゃないですっ!!
「困りですっ!!」

すると来来さんは犬を抱えて立ち上がり、キョロキョロしました。
た。

どうしたんですか？

僕の問いかけも笑ってはぐらかされます。その笑い方もいつものふわふわしたのではなく、……悪魔的な笑い方です。
来来さんって案外悪役が似合うのかもですね。

「……来た」

と、突然来来さんがつぶやきました。

それと同時に黒塗りの高級車が角を曲がってきます。やっぱり外国のはかっこいいですね。いつかあんなのに乗ってみたいです。

ワンッ

犬もそれに賛同するように吠えてくれました。

ワン、ワンッ「ジャン!!」

へ？

車が僕たちの前で止まって中からスーツを着たおじいさんが出てき
ちやいました。

え、えっ？何が起きて・・・？

「お久しぶりです」

驚きで言葉が出てこない僕の隣で来来さんとおじいさんは仲良
さそうに話し始めました。

というか、久しぶりってことは・・・。

「お知り合い、ですか？」

恐る恐るたずねてみるとおじいさんが照れくさそうに答えました。

「ジャンがしょっちゅう来来ちゃんのところへ遊びに行っちゃっ
てね」

犬、ジャンが嬉しそうに吠えます。お前、野良じゃなかったのか・・・。

「ところで、私たち咲良ホールに行く途中なんです」

来来さんがジャンをおじいさんに渡しながら言い出しました。

極上の笑顔で。

なんだか「連れてけよ」とかそんな感じの言葉が重なって聞こえてくる気がします。不っ思議。

おじいさんは運転手さんと二言三言交わして来来さんにも負けないような笑顔で車のドアを開けました。あ、笑顔と言っても来来さんのそれよりも優しさといい人がにじみ出ています。送っていってくださるそうです。

「咲良ホールだね？」

来来さんがうなずくと車は走り出しました。

あれ？咲良ホールでいいんですか？

集合場所は駅だったはずだった思い来来さんに言ってみました。

「連絡しといたから大丈夫」

そんなもんしてましたっけ？

・・・僕と会ってから来来さんがケータイをいじっていたのはあの時だけ。

そう、道端でジャンを見つけたとき・・・。

来来さん、もしかしてはじめから送ってもらったつもりで？

「みんなには秘密だよー？」

フフツと笑う彼女に僕は絶対に逆らわないと誓いました。

急がば回れ、だよ？（後書き）

。これでお題消化完了しました〜！

来来がどんどんとんでもない人に……。彼女から見た世界って凄
そうですね（笑）

それではお付き合いくださりありがとうございました

お題配布元：ひよこ屋様

『のんびり屋』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6227f/>

のんびり屋

2010年10月21日23時07分発行